

新羅の龍神・龍王

田中俊明

2019.1.18 なみはや歴史講座

皇龍寺は龍宮か？

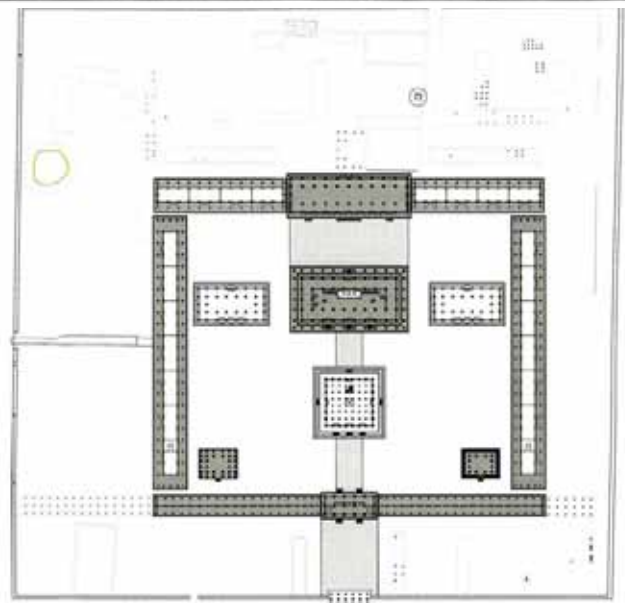
新羅最大の寺院で、護国の中心道場が皇龍寺である。皇龍寺は、龍宮にあった。

『三国遺事』卷三・阿道基羅条に、

京都の内に七処伽藍のあとがある。一は「金橋東天鏡林」である【今の興輪寺である。金橋とは西川の橋のことである。俗に松橋と呼んでいる。寺は我道が基を始めてから、途中廃れたが、法興王丁未年（五二七）になってあらためて創建し、乙卯年に大きく開創した。真興王が完成させた】。二は「三川岐」である【今の永興寺である。興輪寺の創建と同じ時代である】。三は「龍宮南」である【今の皇龍寺である。真興王の癸酉年（五五三）に初めて開創した】。四は「龍宮北」である【今の芬皇寺である。善徳甲午（六三四）に初めて開創した】。五は「沙川尾」である【今の靈妙寺である。善徳王の乙未年（六三五）に初めて開創した】。六は「神遊林」である【今の天王寺である。文武王の己卯年（六七九）に開創した】。七は「婿請田」である【今の曇巖巖寺】と。皆な前佛時の伽藍の墟、法水長流の地なり。

とみえている。

これによれば、皇龍寺の北、芬皇寺の南に龍宮があったことになる（『三国遺事』卷三・皇龍寺九層塔条にも「龍宮の南、皇



왕룡사 복원 배치도

龍寺」とある)。

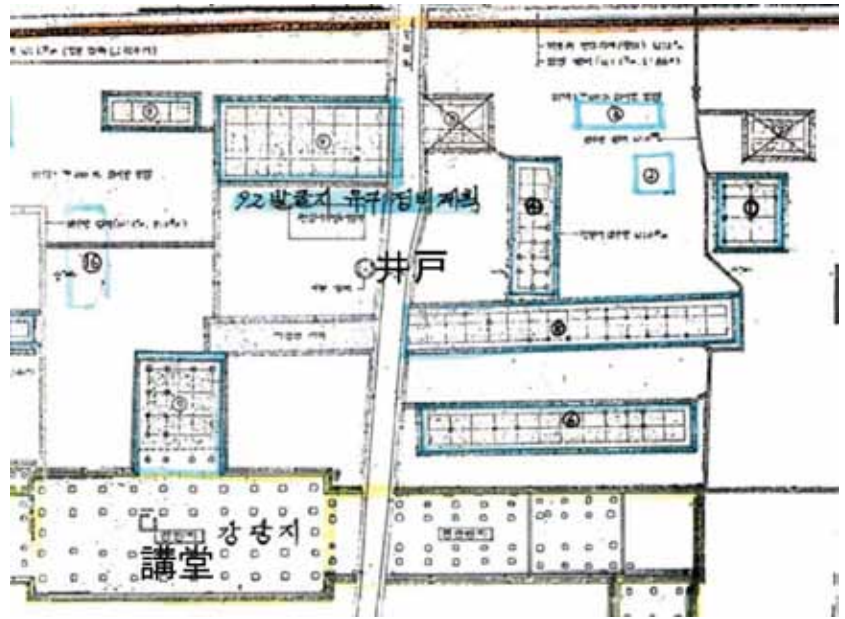
皇龍寺はそもそも、そこに新宮を建てようとして、寺に換えたものであった。

『三国史記』卷四・新羅本紀四・真興王一四年(五五三)条に、

春二月、王は、役人に命じ新宮を月城の東に築かせた。黄龍がその地に現われ、王がそれをふしぎに思って、更ためて仏寺とし、皇龍という号を賜わった。

にある通りである。そこに龍宮があったのであれば、龍が出てきてもおかしくない。

この井戸およびその周辺は一九九二年に整備過程で調査されたが、報告書が刊行されておらず、李恩碩 2012「황룡사 복원 용궁에 관한 일고찰」(『중현 심봉근선생 고회기념논문집 동아시아의 문물』)が少し紹介し、龍宮を論じている。



一 井戸・池は龍宮または龍宮への出入り口

井戸や池は、龍が棲むところ、すなわち龍宮、あるいは龍の通路であった。

まず井戸である。『三国史記』に散見する。卷一・新羅本紀一・赫居世居西干六〇年(三)条に、

秋九月、二匹の龍が、金城の井戸の中から現れた。
とみえるのをはじめ、新羅本紀三・慈悲麻立千四年（四六一）条に、
夏四月、龍が金城の井中に現れた。
とあり、新羅本紀三・炤知麻立千一二年（四九〇）条に、
三月、龍が鄒羅井に現れた。
とあり、同・炤知麻立千二二年（五〇〇）条に、
夏四月、暴風が木を抜いた。龍が金城の井戸に現れた。
とあり、新羅本紀四・法興王三年（五一六）条に、
春正月、王みずから神宮を祀った。龍が楊山の井戸の中から現れた。
とあり、新羅本紀一一・景文王一五年（八七五）条に、
夏五月、龍が王宮の井戸にあらわれた。しばらくで雲や霧のように四散し、飛び去った。

とある。

また、『三国遺事』卷五・明朗神印条には、

金光寺本記を調べてみると次のようにある。師（明朗）は新羅に生まれ、唐に行つて仏道を学び、帰ろうとしたときに海龍の要請をうけて龍宮に入って秘法を伝え、黄金千両を施され、地下を潜行し、本宅の井戸の底に湧き出た。そこで本宅を喜捨して寺にして、龍王の施した黄金で塔像を飾った。光り輝くこと格別であった。そのため金光と名づけた、と。

とある。明朗が唐から帰国する際に、海龍の求めに応じて龍宮に立ち寄り秘法を伝え、その後地下を通過して、本宅の井戸の底に戻った、という。明朗が井戸から出てきたというのであるが、龍の通路の出口として井戸があり、そこを通過して戻ったということであろう。

いっぽう池についても、『三国遺事』卷二・元聖大王条に、

〔元聖〕王の即位十一年乙亥（七九五）、唐の使節が都にやってきました、十日留まって帰った。その後、ある日、二人の女が内庭にあらわれ、奏上して言った。わたしたちは東池・青池【青池は東泉寺の泉である。寺記には、泉は東海の龍が往来して仏法を聞くところであるという。寺は真平王が造営したものである。五百聖衆・五層塔がある。同時に民に納田した】の二龍の妻です。唐の使者が河西国の二人を連れてきて、わが夫の二龍と芬皇寺の井戸の三龍を呪願し、小魚に変えて、筒に入れて帰ってしまいました。願わくば陛下、二人に詔して留めていただきますように。わが夫らは護国の龍です、と。王は追いかけて河陽館まで行き、そこでみずから宴会を開いて、河西の人に詔して言った。あなたがたはどうしてわが三龍を取ってここにやってきましたのですか。もしほんとうのことを言わなければ、必らず極刑を加えます、と。そのため三魚を出してそれを献上し、三処に放った。各々湧き水が一丈余りで、喜び跳ねて行った。唐人は、王の明聖に服した。

とある。東泉寺の泉（青池）は、東海の龍の往来するところであるという。

池に龍がいることは、ほかにも、『三国史記』新羅本紀二・沾解尼師今七年（二五三）条に、

夏四月、龍が宮の東の池から現れた。

とあり、『三国遺事』卷三・興輪寺壁畫普賢条に、

貞明七年辛巳（九二一）五月十五日、帝釈が寺の左経楼に降った。十日ほど留った。殿塔や草木土石が皆な異香を發した。五雲が寺を覆った。南の池の魚龍が喜び飛び跳ねた。国の人々が集まって見に来て、これまでにない壯觀に感嘆した。

とあり、興輪寺の南の池の龍を記す。また同・卷三・魚山佛影条に、

古記には次のようにある。万魚寺は古えの慈成山である。また阿耶斯山【摩耶斯としたほうがよい。これは魚をいうものである】の傍らに呵囉国がある。昔、天の卵が海辺に降りてきて人になり、国を治めた。それが首露王である。この時にあたって境内に玉池ができた。池には毒龍がいる、と。

とあり、呵囉国の例ではあるが、万魚寺の境内の玉池に毒龍がいることを伝える。

同・卷四・関東楓岳鉢淵藪石記条には、

師(=真表律師)が教法を受けて終わり、金山寺を創建しようとし、山を降りて来て、大淵津に至った。そこで突然、龍王が出てきて玉の袈裟を献じた。八万の眷属を引き連れ、そばに仕えながら金山藪まで行った。四方の子がやってきて、一日経たないうちに完成させた。

とあり、真表が金山寺を創建しようとして、山から降りて大淵津に至ったとき、龍王が出てきたという。大淵津は池の端であろう。

百濟の例であるが、武王の母が池の龍と交わって武王を産んだとされている。同・卷二・武王条に、

母がひとりぐらしをしていて、部屋を京師の南の池のほとりに築いていた。池の龍と交通して生まれた。

とあり、同・卷三・法王禁殺条に

武王は、そもそも貧しい母が池の龍と通交して生んだものである。

とある。

また新羅国内ではないが、五台山の太和池の龍も登場している(卷四・慈藏定律条)。

あらためていうまでもないが、龍はもとより架空の動物である。ここまでの話も、龍が実在していたということではない。観念上の話にすぎない。龍の形象は蛇に由来するとか、雷の形であるとか、明確ではないが、王権を象徴するものとみなされることが多い(出石誠彦 1928「龍の由来について」(『東洋学報』17 卷 2 号)、白鳥清 1934「龍の形態に就いての考察」(『東洋学報』21 卷 2 号)、林巳奈夫 1993『龍の話 一図像から解く謎』(中央公論社、中公新書)、荒川紘 1996『龍の起源』(紀伊國屋書店)、李均洋 2001『雷神・龍神思想と信仰 一日・中言語文化の比較研究』(明石書店)など)。また、水の神、雨を司る神としても知られ、四神のひとつ青龍として守護神としての役割も担わされている。そうした思想の多くは中国から韓半島や日本に伝わったといえるが、固有の信仰・思想とも習合し、独自の展開をする部分もある。

二 龍になった新羅王

新羅王と龍との関係をもておきたい。

新羅王として、龍になったと明示されているのは文武王である。

『三国遺事』卷二・文虎王法敏条に、

大王が国を治めて二一年、永隆二年辛巳(六八一)に崩じた。遺詔で東海中の大きい巖の上に葬った。王は平時にいつも智義法師に言っていた。朕が身まかったあと、願わくば護国の大龍となって仏法を崇奉し、国家を守護したい、と。法師が言った。龍は畜であります。何の報いがあるというのですか、と。王が言った。わたしは世間の栄華を長く嫌ってきた。もし大きな報いとして畜となるのであれば、もとよりそれはわたしの願いと合うものである、と。

とあり、同・卷二・萬波息笛条に、

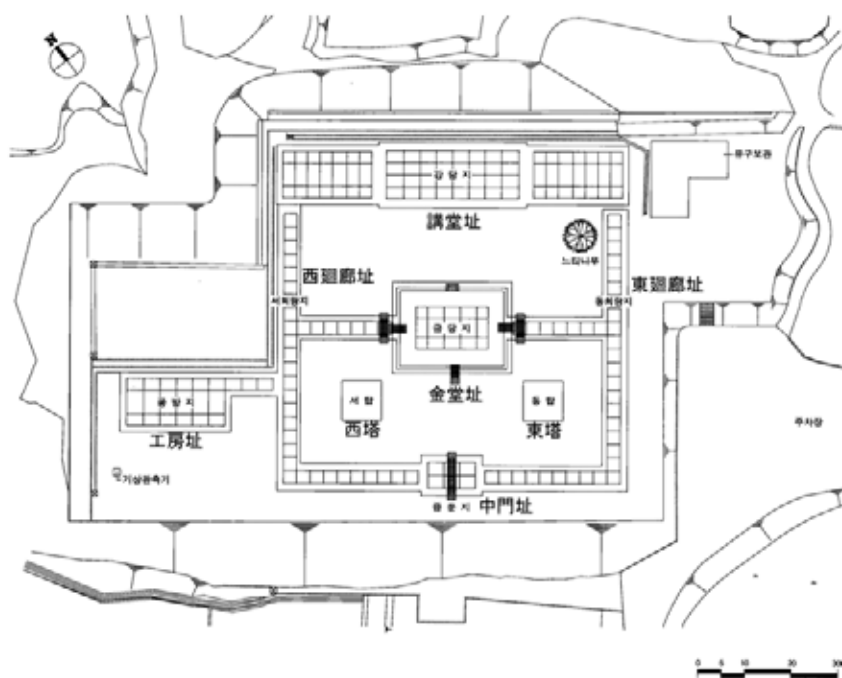
第三一代の神文大王は、諱は政明で、金氏である。開耀元年辛巳(六八一)七月七日に王位に即くと、聖孝の文武大王のために感恩寺を東海辺に創建した【寺中記には、文武王が倭兵を鎮めようとして、この寺を創った。まだ完成しないうちに崩じ、海龍となった。その子の神文が即位し、開耀二年(六八二)に完成した。金堂の石積みの下に東に向いて穴を開けている。それこそ龍が寺に入ってぐるぐるまわる設備である。遺詔の藏骨したところを大王岩と呼んでいる。寺を感恩寺と呼んでいる。その後、龍が形を現わしたのを見るのころを利見台と呼ぶ、と】。明年壬午(六八二)五月一日に海官波琮喰(浪)の朴夙清が奏上して言った。「東海中に小さい山があり、浮かんで感恩寺に向かって来ています。波に随って行ったり来たりしています」と。王はふしぎなことだと思って、日官の金春質に命じてそれを占わせて言った。「わが王の

亡き父は、今、海龍になって、三韓を鎮護しております。そもそもまた金公庾信は三十三天の一子で、今降って大臣となっております。二聖が徳をともにして出てきて城の宝を守ろうとしております。もし陛下が海辺に行幸したならば、必ず無價の大宝を得ることができましよう」と。王は喜んでその月の七日に、駕に乗って利見台に行幸し、その山を望んだ。使者を派遣して確かめさせたところ、山の形勢は亀の頭のように、上に一竿竹があり、昼には二つになり、夜には一つにくっつく【あるものは山もまた昼夜離れたりくっついたりするのが竹と同じであると言っている】。使者がやってきてそのことを申し上げた。王は感恩寺に行ってそこで泊まった。翌日の午時、竹がくっついて一つになった。天地が振動し風雨が暗くなって七日つづいた。その月の十六日になって晴れて波が穏やかになった。王は海に浮かんでその山に入った。龍がいて、黒い玉帯を持ってやってきて献上した。迎えてもてなしいっしょに座らせて、尋ねて言った。「この山と竹が分かれたりくっついたりするのはどうしてか」と。龍が言った。「一つの手で拍っても音がなく、二つの手で拍てば音がでるのと同じです。この竹がものであるのは、くっついてそのあとに音が出るのです。聖王が音で天下を治める瑞祥です。王がこの竹を取って笛を作りそれを吹けば、天下が和平となりましよう。今、王の父は海中の大龍となって、庾信もまた天神となりました。二聖が心を同じくしてこの無価の大宝を出し、わたしに献上させたのです」と。王は驚喜して五色の錦彩や金玉でそれに報いた。そして詔して竹を切らせた。海に出た時、山と龍は忽然と隠れて現われなかった。王が感恩寺に十七日間泊まり、祇林寺の西の溪谷の端に至り、そこで駕を留めて昼をとった。太子の理恭【つまり孝昭大王である】が宮殿を守り、この事を聞いて馬を走らせてやってきて祝った。徐察が奏上して言った。「この玉帯のすべての玉がみな真龍であります」と。王が言った。「汝はどうしてそれを知っているのか」と。太子が言った。「一つの玉を取って水に沈めてそのことを示しましょう」と。そこで左辺の第二の玉をとって溪谷に沈めると、龍になって天に昇った。その地は淵になった。そのため龍淵と呼ぶようになった。駕が戻って、その竹で笛を作り、月城の天尊庫に収めた。この笛を吹けばすぐに兵が退き、病も愈えた。日照りには雨が降り、雨の時には晴れ、風が定まり波も平らかになった。万波息笛と呼んだ。たたえて国の宝とした。孝昭大王の時代、天授四年癸巳(六九三)になって失(夫)礼郎が生還した異変があり、それにちなんで万万波波息笛と呼ぶようになった。詳しくはその伝に見える。

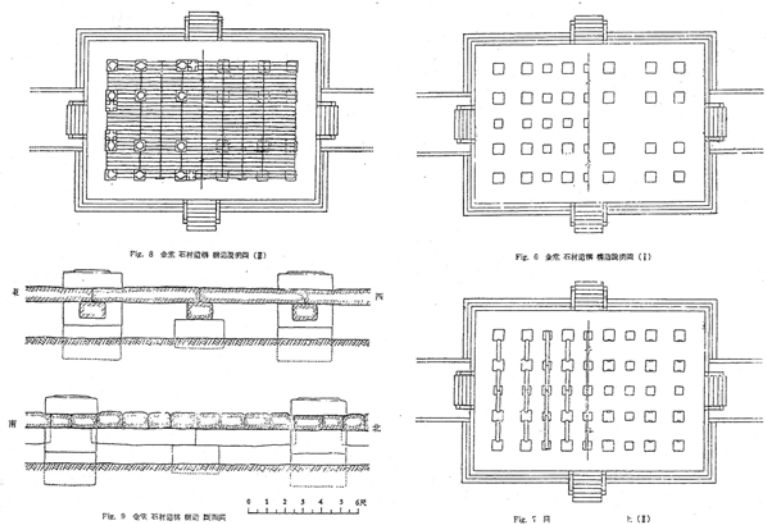
とあるように、龍になったものと観念された。

ここに神文王が完成させたという感恩寺址は、慶州市陽北面龍洞里塔洞にある。一九五九年および一九七九～八〇年に発掘調査がなされた。伽藍は典型的な双塔式で、西塔は一九五九年末から六〇年にかけて解体修理がなされた。その際に第三層屋身から創建当時の舍利蔵置が発見された。また近年も両塔の解体修理がなされている。一九七九～八〇年の発掘調査では、講堂の東西が複廊であることがあらためて確認され、僧房址かとも考えられる。その後、廻廊の西側に工房・僧房が確認されている。

一九五九年の発掘調査において最も注目されたのは、



金堂基壇上面の石造遺構であった。その構成は、花崗岩の石材を使用して、三尺四方で高さ一・五尺前後の基礎石を東西に六個ずつ、南北に四列、計二四個配置する。その上にさらにそれと同じ大きさの別の石を重ねならべ、南北の側に溝穴をあける。その石の形はいわばH字形ということになる。その溝穴を利用して、南北に長い石材をわたして連結する。横の四列には中央に、縦の六列には、二と三、三と四、四と五各列の間にH字形礎石よりもやや小さい石を配置し、これには溝をあげないで、縦長の石材をただのせるだけとする。そしてその縦長の石材の上に、横長の石材をわたし、ぎっしりとつめてならべる。礎石はH字形礎石の上に置かれる。一およそこのような特異な構造をもっている。「これは金堂建物の平面底部に一定の高さの空間を維持するために造った一種の石床だともみることが出来る奇妙な遺構で」あり、建物の基礎を強化するどころか、弱化させるもので、構造上の必要からなされたものとはみれない。これを説明するのが上記の「寺中記」の「金堂の石積みの下に東に向いて穴を開けている。それこそ龍が寺に入ってぐるぐるまわる設備である」という記事で、つまり海龍となった文武王を迎えるための設備ということになる。



それ以外に、赫居世の閼英夫人は雞龍から生まれており、その子南解およびその後の王は龍の子孫であることになる。

『三国遺事』卷一・新羅始祖赫居世王条には、次のようにある。

沙梁里の閼英井【または娥利英井とするものがある】のあたりに雞龍が現れた。そして左脇から童女が誕生した【または、龍が現れて死んだのでその腹を剖くとなかから出てきたという】。姿容は特に麗しかった。しかし唇が雞の觜に似ていた。月城の北川で産湯につかろうとすると、その觜がとれた。そのためその川を撥川と名づけた。宮室を南山の西麓【今の昌林寺である】に営み、二人の聖なる児を奉養した。男は、卵で生まれた。卵は瓠のようである。地元の人たちは瓠を朴と呼んでいる。そのため朴を姓とするようになった。女は出てきた井戸の名を名前にした。二聖が十三歳になった五鳳元年甲子（前五八）に男を立てて王にして、女を后にした。

雞龍はよくわからないが、鶏と龍のいっしょになったものであろうか。龍の一種とみることが出来る。

第四代王の脱解も、龍城国で、龍の子として卵で生まれた。

『三国遺事』卷一・第四脱解王条に、

脱解齒叱今【または吐解尼師今とするものがある】。南解王の時【古い記録では、壬寅年にやって来たというものがあるが、それは誤りである。近ければ弩礼王の即位の初めよりはあとであるが、譲り合った話なくなる。前であれば赫居世の時代になる。そのために壬寅が正しくないことがわかる】、駕洛国の海中に船がやって来て停泊した。その国の首露王が、臣下や民といっしょに太鼓を打ち鳴らして迎え、そこに留めようとした。しかし船は飛ぶように走して雞林の東の下西知村の阿弥浦に着いた【今、上西知・下西知がある。村の名である】。その時に浦辺に一人の老婆がいた。阿珍義先という名であった。それは赫居王の海尺の母であった。船を望んで言った。「この海中には昔から岩がない。なぜ鵲が集って鳴いているのだろうか」と。船を引き寄せて見てみたところ、鵲がその船の上に集まっていた。船の中に木箱があった。長さ二十